



## 専業漁家主婦の生活時間構造の変容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清野, きみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00002334">https://doi.org/10.32150/00002334</a>

## 専業漁家主婦の生活時間構造の変容

清 野 き み

北海道教育大学函館分校家政学教室

### On the Transition of the Daily Life Style of Fishermen's Wives

Kimi KIYONO

Laboratory of Home Economics, Hakodate College, Hokkaido University of Education  
040 Hakodate

#### Abstract

The increase in the earnings of fishermen has some influence on the daily life patterns of fishermen's wives. In order to obtain statistics about the process of change taking place, I made a field research study on the daily life pattern of fishermen's wives from 1967 up to 1975.

The results of this research can be put in a triangle diagram.

I look at the transition which took place during the eight-year period and at the daily time during which they were confined to their household chores and their fishery labor. At the same time, I observe some problems which they meet in the management of their households.

The subjects of the field research study are the wives of the fishermen on the outskirts of the city of Hakodate on the coast of the southern part of Hokkaido.

As comparative data, I used the results of a research done in 1968 on the daily life style of the wives in the same area, and that of the wives employed and unemployed of white collar workers living in Hakodate, an urban center. The research number of the data referred to is 156.

The results of the research are these ;

(1) The time during which the fishermen's wives are confined to their domestic affairs and fishery labor has noticeably decreased since the peak in 1976.

(2) The daily life style seems to be similar to that of unemployed housewives and that of employed wives on holidays within the same age group.

That is, the fishermen's wives are no longer confined to fishery labor as they used to be. Their household duties, however, have not changed considerably.

#### I 研究目的

我国は、水産資源の多くを沿岸漁業に求めてきた。沿岸漁業の就業形態は、家族協業によるものが多いため漁家の主婦は、漁業労働と家事労働の二重の拘束を強く受けていた(3)。しかし近年來

の就業構造の変動により、第一次産業の割合が甚しく低下して、漁家の稼得構造は大きく変化してきた。道南漁家にもこの傾向がある。家族協業依存による漁業労働そのものが、社会的経済的条件の影響を受けて、家庭の保有する労働力に変化を来している時、漁家主婦の生活時間構造はいかなる過程をたどっていくであろうか。これらの資料は極めて少ない(1, 2)。全国的規模で行なった、最近の主婦の生活時間の資料としては、地方別・都市規模別主婦の生活時間調査(5)がある。文部省科学研究費を得て行なわれた総合研究であり、家政学的立場からの資料を得る目的をもって。著者も参加したが、此の際にも漁業に従事している主婦を、対象にすることが出来なかった。生活時間構造は、基本的には、労働時間のあり方に基因するから、漁業を専業とする主婦のそれは、農業に従事する主婦や、家事専業、有職の主婦らとは、当然異なる様態を示す。ここに、専業主婦の生活時間構造の資料を報告し、あわせて、漁業構造との関連による生活時間変容の過程を把握する。昭和40年代の、ほぼ10年間の資料について検討した。その間の家庭管理上の問題も指摘した。

## II 対象及び方法

対象地区は、北海道の南、函館市入舟町14番から21番までの、通称山背泊地区である。調査地の概況と世帯変動、漁業権、漁業内容、夫婦協同作業については、すでに報告した(4)。なお、一世帯当りの年間収入について述べておく。昭和48年現在で、延縄漁業で平均100万4000円、刺縄漁業で平均91万2000円となっている。同年の北海道統計によると、全道平均は158万円であったから、全道的にみて収入の低い地域である。

対象地区の専業主婦に対して、昭和42年、44年、46年、48年の各8月の平日、昭和50年の5月の平日と休日に、留置自計式による生活時間調査を行なった。ただし、毎日面接し補正をして、調査の正確につとめた。標本総数は156である。対象者の一覧と調査年次の標本数を、表1に示した。

対象地区の比較資料には、次の二点をとりあげた。①昭和30年代の専業漁家主婦の資料として、昭和32年調査の、北海道松前町原口部落における漁家主婦生活時間(3)。②昭和46年調査の、地方別・都市規模別主婦の生活時間調査による函館分(5)。同年、函館市在住の主婦6名について、平日休日別・年代別・職業有無別にみた21日間の生活時間調査結果を、家事作業内容分析の資料とした。

表2は、年次別専業漁家主婦(以下漁家主婦という)と、都市(函館市)主婦の生活時間について

表1 対象者一覧

(標本総数156)

年次 昭和(年)	42	44	46	48	50
対象主婦平均年齢 (才)	41.6	40.9	43	45.2	45.4
同居世帯員数 (人)	5.2	5.4	5.19	5.06	4.55
対象数 ( )は配布数	22 (55)	52 (53)	33 (48)	31 (38)	18 (45)
調査日	42.8.17~19	44.8.19~22	46.8.18~20	48.7.19~23 8.17~21	50.5.2~4

○漁協組台張より、配布数を確認、病気、出稼ぎ、留守の理由から調査不能の分を除き、配布した。配布数は( )で示した。

調査日において、留守、受諾後生じた家庭事情で拒否、不能を除いたものが実際の調査対象数である。

○調査日は、50年のみ、平日と休日の組みあわせ。他は平日3日ないし4日の連続である。

表2 主婦の生活時間構造(分)

項目	時間構造		拘束時間								非拘束時間		平均束時間			
	家事	労働	睡眠	食事	身の回り	休養	趣味	テレビラジオ	新聞雑誌	勉強	交際・外出	その他				
年次別 專業漁家 主婦	昭和42年	383.0	210.0	464.3	148.0	40.1	6.5	0.45	93.0	12.0	0	61.0				
	昭和44年	383.9	211.7	452.3	91.9	29.6	83.0	0	101.5	11.5	0	65.7				
	昭和46年	504.4	151.1	430.8	108.9	37.4	34.9	6.9	222.3	21.8	0	54.7				
	昭和48年	393.5	170.2	413.9	116.0	69.5	135.8	20.3	172.4	43.5	0	57.5				
	昭和50年(平日)	364.0	121.5	483.7	95.8	50.2	67.0	2.1	157.8	13.0	0	42.8	98分			
	(休日)	302.0	40.0	523.2	117.0	57.5	63.9	20.0	162.0	14.3	0	98.0				
	昭和32年(嫁)	175.0	660.0	480.0	45.0		65.0	0	0	0	0	0	15分、43才			
	(姑)	195.0	865.0	330.0	75.0		35.0	0	0	0	0	0	50才			
	都 市 主 婦 (函館)	A	年 代 別	平	30才代	495.0	131.0	446.0	58.0	158.0	138.0	77.0	120.0	0	35.0	
				40才代	444.0	110.0	453.0	56.0	53.0	115.0	76.0	78.0	0	51.0		
50才代				655.0	0	450.0	50.0	35.0	20.0	70.0	160.0	0	0			
その他				590.0	0	410.0	60.0	20.0	195.0	75.0	100.0	0	0			
休				30才代	424.0	505.0	56.0	53.0	50.0	136.0	90.0	144.0	0	52.0		
40才代				420.0	37.0	505.0	56.0	53.0	116.0	63.0	120.0	0	69.0			
50才代			425.0	0	408.0	60.0	20.0	30.0	90.0	145.0	0	220.0				
その他			430.0	0	510.0	60.0	15.0	295.0	0	190.0	0	0				
職 業 別			平	無職	512.0	0	452.0	57.0	57.0	128.0	72.0	106.0	0	46.0		
			内職	303.0	293.0	455.0	56.0	45.0	101.0	86.0	70.0	0	31.0			
			勤務	243.0	511.0	420.0	55.0	50.0	109.0	51.0	49.0	0	0			
			休	無職	426.0	0	502.0	57.0	54.0	128.0	88.0	116.0	0	76.0		
		内職	422.0	114.0	545.0	53.0	46.0	109.0	51.0	127.0	0	34.0				
		勤務	543.0	0	563.0	49.0	60.0	110.0	13.0	126.0	0	85.0				
B		全 体	一	①20才代	658.0	0	469.0	65.0	42.0	28.0	4.0	88.0	15.0	0	40.0	31分
			般	⑥50才代	463.0	0	576.0	70.0	40.0	15.0	4.0	198.0	32.0	1.0	40.0	16分
			内	②30才代	318.0	41.0	475.0	63.0	71.0	13.0	212.0	102.0	62.0	36.0	27.0	20分
			職	③40才代	369.0	195.0	431.0	117.0	72.0	3.0	14.0	103.0	7.0	0	84.0	45分
			有	④40才代	216.0	406.0	388.0	82.0	54.0	16.0	4.0	71.0	57.0	5.0	52.0	39分
			職	⑤40才代	290.0	340.0	504.0	84.0	49.0	3.0	17.0	102.0	17.0	0	42.0	37分
		休 日	一	①20才代	626.0	0	464.0	59.0	28.0	20.0	0	150.0	7.0	10.0	16.0	60分
			般	⑥50才代	311.0	0	750.0	65.0	34.0	10.0	0	230.0	40.0	0	0	
			内	②30才代	339.0	50.0	513.0	69.0	73.0	33.0	132.0	68.0	47.0	50.0	46.0	20分
			職	③40才代	267.0	55.0	510.0	87.0	66.0	0	0	176.0	7.0	0	214.0	58分
	有		④40才代	260.0	0	420.0	92.0	63.0	27.0	220.0	87.0	0	20.0	233.0	18分	
	職		⑤40才代	478.0	0	540.0	107.0	50.0	0	60.0	155.0	20.0	0	30.0		
平 日	一	①20才代	660.0	0	475.0	65.0	47.0	13.0	11.0	74.0	3.0	12.0	53.0	27分		
	般	⑥50才代	482.0	0	544.0	69.0	46.0	18.0	6.0	242.0	29.0	2.0	36.0	2分		
	内	②30才代	316.0	41.0	473.0	63.0	72.0	7.0	229.0	106.0	53.0	30.0	28.0	22分		
	職	③40才代	369.0	195.0	417.0	125.0	69.0	5.0	4.0	97.0	7.0	0	61.0	46分		
	有	④40才代	269.0	470.0	388.0	82.0	47.0	16.0	6.0	60.0	12.0	20.0	24.0	46分		
	職	⑤40才代	292.0	368.0	500.0	75.0	49.0	4.0	0	93.0	18.0	0	41.0			

て、使用した資料の一覧である。表中のAは、②の、都市主婦の年代別・職業別の函館分を、またBは、21日間の事例調査結果である。また、生活時間構造を、拘束時間、非拘束時間、半拘束時間に大別した。

### III 調査結果と考察

#### 1 漁家主婦の生活時間構造と拘束時間の年次推移

表2によって、昭和40年代における漁家主婦の生活時間構造の概略は、次のとおりである。

1) 拘束時間のピークは昭和46年である。このうち家事労働時間は504分で、昭和40年代の最高の時間量である。これに反し、労働時間は昭和46年をピークに下降していく。

2) 非拘束時間のうち、睡眠時間は昭和48年までは減少し続けてきたが、昭和50年の平日で60分以上もふえ、休日になると更に増し8時間を越している。身の回りの時間は、昭和44年が最低の30分で、以後50年まで漸増の傾向がある。ラジオ・テレビの視聴時間は、昭和46年まで増加しつゞけ、その後は、120分前後を維持している。その他の時間は各年次により、ばらつきが目立っている。

3) 半拘束時間は、昭和50年の平日と休日に差が出てきた。

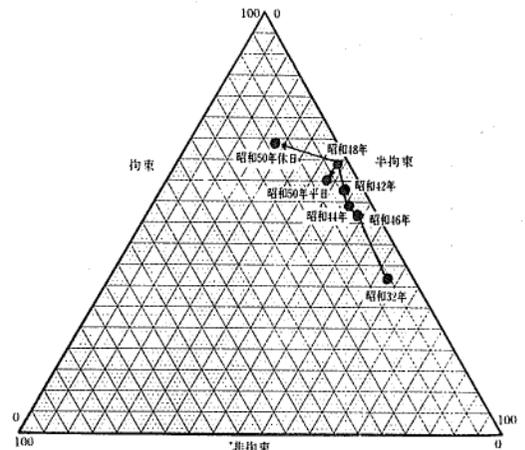
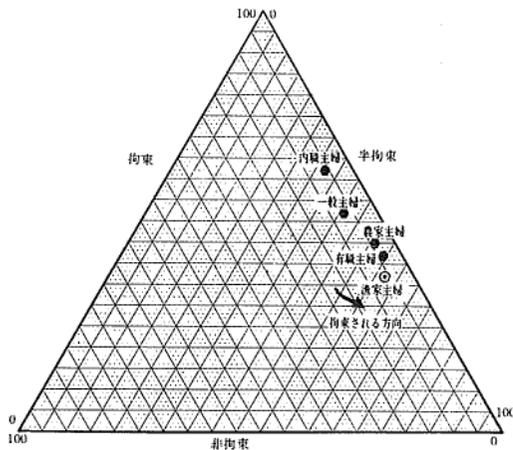


図1 道南地方各階層別主婦の生活時間構造—昭和32年 図3 道南地方専業漁家主婦の生活時間構造—年次別推移

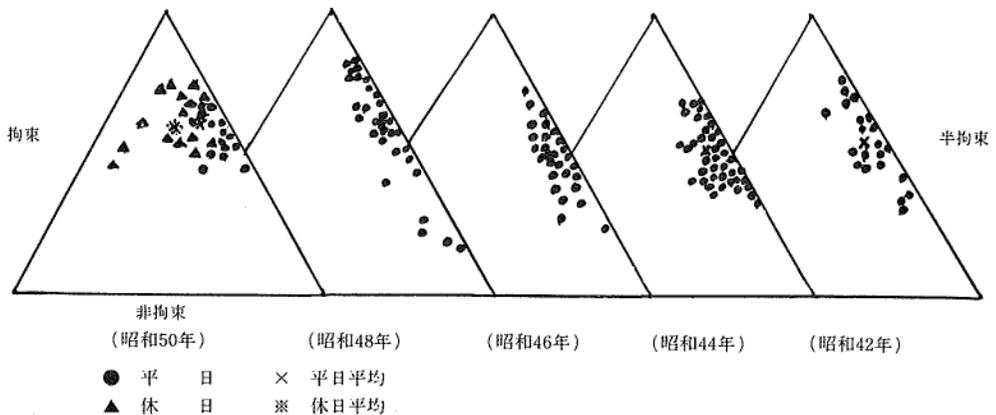


図2 道南地方専業漁家主婦の年次別生活時間構造

以上の状況を、昭和32年の場合と比較してみよう。三角図表の各辺は、拘束時間、半拘束時間、非拘束時間の辺である。図1は、昭和32年の道南地方各階層主婦の生活時間の、拘束時間の点を求めたものである。漁家主婦の◎印が示す拘束の程度は、飛び抜けて強かったことを示している(3)、ところが、図2のように、漁家主婦の年次別推移でみれば、昭和40年代に入って、拘束が急速に弱められている、昭和50年には、平日と休日に明瞭な差がみられる。この原因は上述したように労働時間の減少と睡眠時間の増によるものである。

これら漁家主婦の各年次毎の平均点の内容を、図3に示した。

さて、漁家主婦の生活時間構造を都市(函館市)の主婦と比較してみれば、どのようになるであろうか。この場合、昭和46年の全国調査の結果函館分と照合させる必要から、漁家のそれは、昭和46年度分を採用することとした。

まず、年代別、職業別の都市主婦の資料Aについて、平日と休日別に三角図表においてみた(図4-1)。函館市の場合の職業有無別でみれば、平日の勤務をもつ主婦と内職主婦、年代別では、平日の50歳代と40歳代の主婦の拘束時間が多い。勤務をもつ主婦は、休日でも40歳代の平日と変わらない。この傾向は全国調査の結果と同じである(5)。また、21日間連続調査をした場合についても、図4-2のように、40歳代、50歳代の勤務をもつ平日の主婦の拘束が強い。また図4-2の上に、漁家主婦の年次別推移の点を連らねて矢印であらわし、比較したところ、昭和32年においてきわだっていた拘束時間が、昭和46年では、都市の40歳代内職主婦の平日に接近し、有職の40歳代主婦の拘束時間より低くなっている。そして、昭和48年、50年になると、都市の30歳代、40歳代の一般主婦の平日、40歳の有職主婦の休日と同程度の拘束時間となっている、漁家主婦としての従来までの特徴はもはやみられなくなった。

## 2 家庭管理上からみた生活時間構造

漁家主婦の生活時間構造から、家庭管理上の問題を抽出する。

まず、対象地区全体の世帯類型別、世帯人員別の、家事労働時間から、夫婦と子供の家族構成をもつI世帯類型をとりだし、各階層別主婦の家事労働時間を内訳別に比較した(表3)。I世帯類型は、漁家全体の44.2%にあたり、一世帯の平均人員は4.72人、有業人員は1.70人(北海道の平均

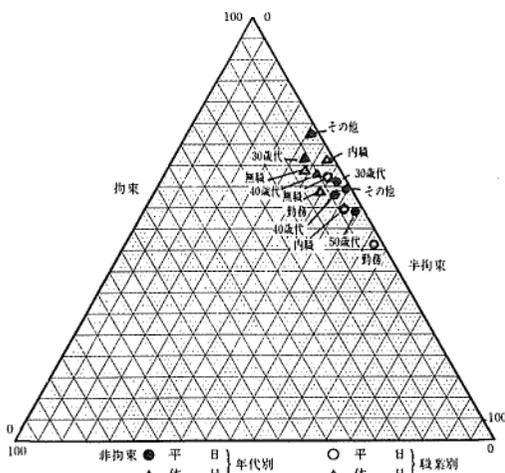


図4-1 都市(函館)主婦、年代別、職業別、平日休日別、生活時間構造—生活時間研究グループ、昭和46年

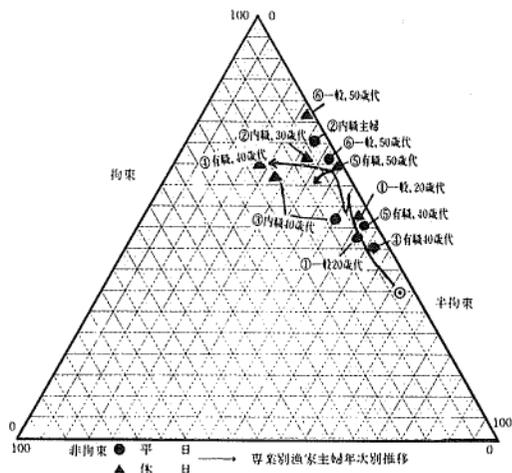


図4-2 都市(函館)主婦、年代別、職業別、平日休日別、生活時間構造—21日間、昭和46年

は、昭和45年4.8人、46年5.0人、48年4.8人である)、主婦の平均年齢は、46.5歳である。比較のため、都市一般主婦、内職主婦の場合も、ともに40歳代の年代のものにした。なお都市一般主婦の場合に、乳児をもつ20歳代の主婦もとり出しておいた。

表3によりI世帯類型の家事労働時間は489分、漁家V世帯類型の場合と共に、労働時間量は低い。また、世帯人員別では、4人の場合、448分であり、7人の場合の $\frac{2}{3}$ の時間量である。内訳別にみると、裁縫・編物、家族や子供の世話、弁当つくりの項目に、他の世帯類型や世帯人員別と比較して大きな違いがあったが、I世帯類型の家事労働時間をもって、漁家主婦のそれを代表する資料とみなすことが出来よう。

比較の結果、漁家主婦は、炊事、食事の後かたづけの時間量においては都市サラリーマン主婦と、ほぼ共通しているのに、裁縫・編物のところで、都市一般主婦の8倍以上の時間をかけている。また、買物、掃除、洗濯などでも時間量が多い。

一般に家庭管理上、家事労働時間を決定する要素として、耐久消費材の普及率、家族の役割り分担、家事労働にみる重複行動をあげる。対象地区の耐久消費材普及率では、電気洗濯機96.1%、電気冷蔵庫90.2%、掃除機72.5%、1週間の洗濯回数一世帯平均5回である。クリーニングの利用状況などをみても、都市の一般家庭と大差がない。また、家族の役割り分担でも、漁家主婦の78.4%が、家事育児の負担者であった。残る重複行動について、対象主婦全数に対する調査をしたところ、表4のように、家事と食事の重複行動が群を抜いて高い。家事のうちでは、裁縫・編物、子供や家族の世話と、テレビ視聴の重複行動がもっとも多い。

表3 専業漁家主婦世帯類型別、世帯人員別家事労働時間及び都市サラリーマン主婦家事労働時間(分)

項目	家事	家事労働時間(分)											1世帯平均家事時間	比率(100%)
		炊事	食事の後かたづけ	掃除	洗濯	裁縫・編物	買物	子供の世話	家族の世話	弁当づくり	雑用			
世帯類型別	I(夫婦+未婚子)	99.0	71.7	48.1	64.2	124.4	57.1	53.0	140.0	68.0	58.8	489.1	100	
	II(I+親を除く親族)	116.7	109.7	73.3	62.5	236.7	38.0	172.0	72.5	35.0	156.7	765.0	157	
	III(片親+未婚子)	75.0	75.0	45.0	0	0	55.0	0	0	0	285.0	535.0	109.5	
	IV(両親+子供夫婦+孫)	117.8	210.8	60.0	60.0	3.3	50.5	197.1	30.0	0	130.0	659.6	134.9	
	V(片親+子供夫婦+孫)	104.6	63.9	68.6	68.6	55.0	57.5	144.3	46.7	47.5	136.0	528.7	107.2	
世帯人員別	2人	83.3	70.0	40.0	60.0	0	50.0	0	0	50.0	285.0	373.7	83.6	
	3人	138.8	65.0	57.5	45.0	102.5	76.3	0	0	0	50.0	543.7	121.3	
	4人	98.3	70.8	42.5	70.8	130.0	60.0	46.7	0	90.0	59.0	448.3	100	
	5人	89.4	69.1	56.4	72.1	82.5	59.7	166.7	65.0	60.0	115.0	509.2	113.5	
	6人	129.4	81.6	67.6	63.3	65.0	49.7	128.8	41.7	35.0	107.1	548.4	120	
	7人	114.4	101.3	58.8	65.0	237.5	50.0	72.5	85.0	0	115.0	678.9	150	
	9人	90.0	95.0	80.0	0	0	45.0	120.5	0	0	120.0	435.0	94	
都市サラリーマン	有職40才代	96.0	65.0	20.0	25.0	15.0	18.0	0	0	20.0	27.0	266.0		
	有職50才代	114.0	71.0	63.0	30.0	9.0	22.0	0	0	0	31.0	340.0		
	乳児あり20才代	116.0	43.0	40.0	75.0	16.0	31.0	139.0	156.0	0	42.0	658.0		
	内職主婦	107.0	60.0	52.0	58.0	25.0	41.0	0	0	0	26.0	369.0		

(昭和46年)

表4 専業漁家主婦のテレビ視聴時間にみる重複行動と比率—対象者全数について

生活行動	延べ所要時間(分)	延べ日数(日)	1日1世帯 平均時間(分)	比率(100%)
食事	2555	42	60.8	32.3
家事	4065	37	109.9	51.4
交際	130	2	65.0	6.0
休養	705	12	58.8	9.1
趣味	30	1	30.0	0.4
新聞・雑誌	410	13	31.5	5.2
計	7895	107	73.8	100.0

(昭和46年)

#### IV 結 論

昭和40年代における、専業漁家主婦の生活時間構造は、次のようである。

- ① 昭和32年と比べ、昭和46年をピークにして、労働と家事による拘束が著しく弱まった。
- ② 各階層別の主婦のなかで比べると、同年代の都市サラリーマン家庭の有職主婦、一般主婦の平日の生活時間構造に接近している。昭和50年になると、平日と休日に、時間的差がみられるなど都市化してきている。
- ③ 都市型の子婦の生活時間構造をもちながらも、家事時間の内容において、有職主婦、一般主婦と比べて重複行動が多い。これは家庭管理上の問題である。

今まで拘束時間の強かった専業漁家主婦は、その特徴を失ないかけている。若干の家庭管理上の問題をもちながらも、産業就業構造の変動が進むにつれ、都市サラリーマンの生活時間構造に包摂されていくと思われる。こうした過程を充分よみとることが出来た。

なお論文の一部は、日本家政学会東北北海道支部第20回総会において報告したものである。

#### 文 献

- 1) 稲葉ナミ・桑田百代・杉浦徳美(1973) 共働き家庭と一般家庭の夫妻の生活時間構造について(第9報)。家政誌, 24, 8, 63-67.
- 2) 稲葉ナミ・桑田百代・杉浦徳美(1974) 共働き夫妻と一般家庭夫妻の生活時間構造(第10報)。家政誌, 25, 2, 55-61.
- 3) 清野きみ(1957) 漁村部落の家庭生活と家族関係。北海道教育大学研究紀要, 7, 90-115.
- 4) 清野きみ(1974) 専業漁家主婦の世帯変動について。北海道教育大学紀要II C, 25, 25-37.
- 5) 生活時間研究グループ代表稲葉ナミ(1971) 地方別・都市規模別主婦の生活時間調査。昭和46年度文部省科学研究補助金(総合研究A)による。